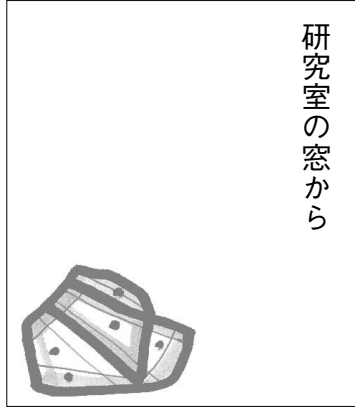


研究室の窓から



「専門セミナー」ガイドダンス

―学生との協同作業の試み―

近藤 真庸

「専門セミナー」(定員四名)を

中核としたカリキュラム

毎年、五月の連休明けになると、キャンパスは、にわかに活気づく。「解体新書」という小冊子を携え、教員の研究室を歩き来する二年生の姿が目立つようになるからである。

法学、政治学、経済学、財政学、地理学、都市計画、農業政策、協同組合論、生物学、化学、物理学、情報工学、土木工学、建築学、哲学、文学、言語学、社会学、心理学、歴史学、人類学、教育学、社会福祉学など、多方面の学問分野にわたって、教員の数だけ開設されるバラエティーにとんだ「専門セミナー」の中から、入学後わずか一年にして、二年次後期から卒業論文提出までの二年半、自分が所属する、意中の研究室への選択を迫られるのである。

岐阜大学地域科学部はいまから九年前(一九九七年十月)に、政策、構造、文化、環境の四講座からなる新設学部として誕生した。学生定員(一学年)百十名に対し、専任教員五十名。大学院生(修士課程)を加えても、総勢六百名足らずの小規模「総合学部」である。

私たちの学部では、一年前期の「教養(入門)セミナー」、一年後期から二年前期に開講される「基礎セミナー」を含めたセミナー形式による少人数指導を軸にしたカリキ

ュラムを確立しており、「専門セミナー」(一学年定員四名)はその中核に位置するものと考えている。

それだけに、悔いのない「専門セミナー」選択を学生たちにもしてもらうために、五月初旬には「専門セミナー案内」というシラバスを配布するとともに、「セミナー紹介」を中心とした特設ガイドダンスも実施してきた。

そうしたなかで、四年前、学生たちから、「後輩のために『専門セミナー』選択を支援しよう!」という動きが起こってきたのである。冒頭で紹介した「解体新書」づくりの実践がそれである。

学生主体で作成された、

小冊子「解体新書」

「解体新書」づくりの取り組みは、前年度の二月中旬から始まる。先輩から引き継ぎ、今回で四度目の試みとなる「二〇〇六年度版」も、これまで同様、企画から原稿依頼、編集・発行までの実務は、すべて大

学生協の総代を務める四名の学生たちの手で行われた。

「はじめに」では、先輩から二年生へのメッセージが記されている。

「先生と話すことで先生の人柄も見え、選択のための更なるヒントともなるでしょう。興味あるセミナーはとことん訪問して、自分の関心のある分野について先生とじっくり話し合ってみてください。また、最初から一つのセミナーに絞るのではなく、出来るだけ多くの先生に話を聞きに行きましよう」

以下、六〇頁にわたって、学部教員が開設するすべての「専門セミナー」についての紹介が続く。

そこには、教員とそれぞれのセミナー所属学生に配布される「調査票」に記載された事項が、教員の写真と一緒に原則としてそのまま掲載される。

教員に「回答」を求められる「七項目」は以下の通りである。

他の「専門セミナー」の様子を知る格好のチャンス

- ① 担当教員の研究テーマ・内容
- ② 読んでおいて欲しい本、受講しておいて欲しい講義
- ③ 所属セミナー生が取り組んでいる研究テーマ
- ④ セミナーでの卒業までの指導過程
- ⑤ セミナー生に望むこと、身につけて欲しいこと
- ⑥ セミナー選択にあたっての学生へのアドバイス
- ⑦ 所属セミナー生のこれまでの卒業論文テーマ

これに加えて、セミナーの進め方・雰囲気、課題やレポートの難易度・頻度、担当教員の人物評価、勉強以外での教員との交流など「六項目」について、所属学生から寄せられた「回答」が掲載されることにな

るのである。

私の「回答」の一部(④⑤)と、学生の「評価」を紹介しておく。

【④セミナーでの卒業までの指導過程】

・二年後期：「生と死」をめぐる人間の諸問題を考えるための文献学習。春に合宿（「生と死」を考える旅）を実施。論文（A4・六枚）作成

・三年前期：「生と死の教育」に関する共通テーマを決め追究する。論文（A4・十枚）作成。講義「健康教育論」での模擬授業実践のための教材研究（昨年度のテーマは、「ハンセン病」）。

・三年後期：卒業論文テーマ決定のための準備。問題意識を高め、先行研究を読み、整理する。一日ゼミの実施。

・四年前期：就職活動。卒業研究の個別指導。毎月末の全員ゼミで「卒論中間報告」。

・四年後期：卒業研究の論文執筆指導。

二、三年生ゼミのチューターとして指導
・助言。院生ゼミでの報告。

【⑤セミナー生に望むこと、身につけて欲

しいこと】

・卒業までに最低五十冊の専門関連図書を読む。

・「要約力」「質問力」「コメント力」。

・学年集団としてのレベルアップ。学年を超えた研究交流。

・研究テーマに関わる「現場」に足を運び、「人」と出会う。

【学生による「セミナー評価」】

・先生は、穏やかで優しい面もある一方で、時に厳しく指導(注：B型です)。

・他学年と仲が良く、和やかな雰囲気です。楽しいセミナーです。

・基本的に各学年でゼミ。月に一度の全員ゼミでは、就活や卒論の進捗状況と交流。新歓、忘年会、追いコン有り。

・このセミナーに入ると、自分の意見や資料の内容を、要点をまとめて話せる能力がつかます!(就活に役立ちます)

このように『解体新書』を読むと、各教員のセミナー観と実際の専門セミナーの様

子が伝わってくる。総勢五十名という小さな所帯ではあっても、実践交流をする機会はある。ほとんどののが実情であり、『解体新書』は、セミナーを選択する二年生のみならず、私たち教員にとって、実践の誌上交流の場の機能をも果たしてくれているのである。

研究室訪問、体験セミナーから セミナー選択へ

一カ月間に及ぶ研究室訪問、セミナーへの体験参加を経て、いよいよ第一希望の教員に志望理由書を直接提出することになる。

といっても全員が第一志望のセミナーに入れるわけではない。「定員四名」という制限があるからだ(これについては、「撤廃論」を主張する声もある)。

今年度、私の研究室に訪問した学生は十二名。そのうちセミナーに体験参加した学生は十二名であった。そのうちの七名が「志望理由書」を提出してくれた。

全員が異口同音にこう語っている。

「近藤先生ゼミを志望したのは、自分が頑張れば、大きなやりがいを感じられるのではないかと思ったからです。残りの大学生活を充実したものにするために近藤ゼミナーで学びたいと思います」

それから一週間、志望してくれた学生一人ひとりと面接を繰り返し、絞り込むのである。せっかく志望してくれた学生を「落とす」教員にとっても、それはまさに「苦渋の選択」なのだ。

他の教員の研究室に同行し、受け入れの打診を行うなどの「アフターケア」も教員の重要な任務と考えて実践している。

以上紹介した、専門セミナー選択にかかわる一連の取り組みを、学生との協同作業による「自己点検・授業評価」の試みとして、今後も継続・発展させていきたいと考えている。

こんどう・まさのぶ
岐阜大学・地域科学部